

「地元ナースとわたし」

「地元医療福祉機関の看護職に期待すること」

川西湖山病院

乾 清重

我が国における社会問題として、高齢化、人口減少は大きな問題である。高齢者人口増加と生産年齢人口減少は、都会田舎の区別無く、病院という一つの縮図社会において顕著である。現在急性期病院である地域基幹病院の入院患者平均年齢は75歳を越え、病棟はさながら極超高齢者社会と化している。高齢者には高齢者の病態、身体精神機能があり、何より今後の残された時間から考えられる人生観が存在する。にも拘らず、高度成長期の日本の年齢構成に対応したままの急性期病床一辺倒の現在の日本の病床構成は、人口構成の急激な変化から取り残され漂流している。入院治療を受けることになる高齢者は、治療開始以前の問題として、三大介護である、食事介助、排泄介助、入浴介助が不可欠な場合が多い。しかしながら、急性期基幹病院には介護福祉士の配置は無く、高度医療に追われる看護師が歯を食いしばり看護と介護の激務に耐えているのが現状である。

一方、急性期治療終了後の受け皿である療養病床や介護施設では高度医療を行わないため、看護教育を受けた直後の最初の就職先として認知されることは少ない。輸液ポンプも人工呼吸器も無い病院施設での勤務が、魅力無き職場と映るのは当然である。しかし、どのような職場が魅力的であるかは、どの職業でも直接見聞無しでの判断が危ういのは言うまでもない。療養病床や介護施設で三日過ごせば、病棟勤務看護師の笑顔、やりがい、充実した日々が高度医療機器の有無とは関係なく、患者さん一人ひとりに寄り添う看護を実践できることに由来していることが肌で感じ取れるものと思う。そして、看護本来の“寄り添う力”を発揮できる環境で働く人材が増加し、現在の日本の人口構成に見合った病床構造再編が実現することが、光が見えない暗闇でもがく日本の医療現場を救う最良の処方箋となるものと思われる。

「山形発 地元ナース養成プログラム」を全国に先駆けて取り組まれる山形県立保健医療大学の皆様の慧眼に感謝申し上げます。

(822字)